

空を飛んだオッチ

2005(平成17)年6月24日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督＝澤村正喜／原作＝海老沢泰久／音楽＝小六禮次郎／出演＝山辺悠太／高宗歩未／中村憲和／平田満／ベンガル／嶋田奏子／渡辺梓／南果歩／倍賞千恵子（シネマ・ディスト配給／2005年日本映画／102分）

第3章

DVDでもじっくり楽しみたい

……子供はみんな夢を見るもの。もしもボクが空を飛べたなら……男の子なら誰にもそんな空想をしたことがあるはず。しかし、もしそんな夢が実現したら……？ そんな子供がいれば仲間の輪を壊すだけではなく、大人たちの秩序までも破壊する危険人物。「人と少し変わっていて何が悪い！」そう叫ぶ少年の心は、大人たちの差別の心の裏返し……。『自民党をぶっ壊す！』と威勢のよかった小泉改革のように、この映画が、いかにも当たり前のようにならわけていながら実はかなりインチキな大人の秩序をぶっ壊してもらいたいものだが……？

もしも空が飛べたなら……？

少年は夢を見るもの。ましてや「夏休み」となれば無限の可能性があり、男の子なら誰でも1度くらいは「もしも空を飛べたなら……？」と想像したことがあるはず。しかしそんな夢が現実になったら果たしてどうなるのだろうか……？

そこまで突っ込んで考えないのが普通だが、この映画の原作者がそこまで考えたのは偉い。しかしてその結論は……？ それは残念ながらあまり芳しいものではない。つまり、人と違う（ことができる）ということは、プラス面はあるものの、普通の人とは違うという面を追及されるとどうしようもないほどのマイナスになってしまうわけだ。もしも人間が千手観音のように手が千本あったり、1本の手に指が10本ついていれば何かと便利……。そう考える人は少なく、普通それは「化け物」と考えられてしまうだろう……。しかもそれは、秩序を大切にする

大人社会だけではなく、主人公オッチ（山辺悠太）のクラスという子供社会でも同じだった。たった1人、これも足が不自由なため人とは違う立場にある少女真理子こと「まりっぺ」（高宗歩未）を除いては……。

こちらの「さくら」は64歳！

日本人女性の「さくら」という名前は、誰にでもすぐに覚えてもらえるホントにいい名前。今日本で1番有名な「さくら」は女子ゴルフ界の新星、横峯さくら。宮里藍と並ぶ19歳の少女が口うるさい（？）父親をキャディとして従えながら、さっそうと最終18番グリーンへの花道を歩いてくる姿はカッコいいものだが、いつもそうであるわけではない。そういうシーンを現実にするまでには、涙ぐましい父親の努力や父娘の確執があったことは、最近のテレビでもよく報道されているとおり……。ひと昔前、あの渥美清の生存中、そして毎年のように「寅さん映画」がつくられていた時代の日本を代表する「さくら」は、何ととっても寅さんの妹の「さくら」。しかし、長年この「さくら」を演じてきた倍賞千恵子は、1941年生まれだから今や64歳。かつての「下町の太陽」時代の若々しい姿をまぶしく見つめていた私としては、すっかりおばあさん風になった姿をスクリーン上で見るのは少し寂しいが、それでも年相応のいい味を出して「ばあちゃん」を演じているのは、役者としては大いに幸せ……？

南果歩はいい味を

オッチとばあちゃんが住んでいるのは、飛騨高山にある田舎村。美しくのどかな風景が広がり、ワンパク坊主のオッチには絶好の環境だが、現実の生活は全く別。久しぶりに「さえない小説家」金山（金山一彦）を連れて里帰りをしてきたオッチの母親陽子（南果歩）は、「いいところだねエ」と平凡な称賛の言葉を投げかけてくる金山に対して、「あんたは田舎を知らないからそう言うのよ！」と厳しい本音のお返しを……。陽子が東京で働き、毎月きちんとばあちゃんに仕送りをしているのは立派だが、果たして陽子はどんな仕事を……。そんなことを詮索しても仕方がないし、陽子と金山との関係をあれこれ想像しても仕方がないが、朝起きた時、男と寝ている母親を見たオッチはそりゃショックだったはず。

もっとも、この母親は男にだらしがない、ふしだらな女かというとは決してそうではなく、むしろ逆にやさしい母親だったのは意外……。そんな陽子を、南果歩がいい味を出して演じている。もっとも、これはこの映画の本筋とは関係のない話だが、ひょっとしてこんな母親の子として生まれ、ずっとばあちゃんと一緒に生活していたオッチだからこそ、空を飛べたのかも……？

非常時（？）にこそわかる人間性！

社会も家庭も平穏で何の問題もない場合は、人間性が露骨に表に出ることはあまりないもの。しかしイザという時、非常時になると、否応なく人間の本性が露呈されることに……。この映画での非常時とはもちろん、オッチが空を飛んだこと。「そんなバカな」と一笑に付している間は楽しいおしゃべりタイムだが、それがホントの話だととなると話は別……。

そんな時、大人たちが示す反応は原則として「内密に！」というもの。つまり「ここだけの話にして、決して外に漏らさないように」というものだ。そんな指示を出したのは、「あってはならないことは……あってはならないのです」と名セリフ（？）をはく、「コトなかれ主義」の典型ともいえる校長先生（平田満）。これだから、官僚的な組織のボスって嫌い……。その他、

- ①なぜ急にオッチの運動能力が高まったのか、とライバル心を燃やし、自分の目撃話を信用しない仲間たちにイラついて、その実証のために2階からオッチを突き落とす同級生の清（中村憲和）、
- ②オッチが空を飛ぶところをテレビに公開して金儲けをしようと企む、オッチのおじさん（中村繁之）、
- ③そして、思いもかけず突き落とされたはずのオッチがホントに目の前で空を飛ぶのを見て、「あなたいったい何者なの！」と叫ぶ体育担当の里子先生（嶋田奏子）などそれぞれの反応が面白く、それぞれの人間性がモロに露呈されてくる……？

抵抗勢力の代表はまりっぺのお母さん……。？

去る6月17日に55日間の会期延長を決定した「郵政国会」では、郵政民営化法案反対の急先鋒は、郵政事業懇話会会長の綿貫民輔氏。これぞまさに小泉改革に

対する抵抗勢力の代表だ……？ それと同様に、ストーリーの濃淡を明確にさせるためとはいえ、この映画で抵抗勢力の代表と受け止められても仕方がないのが、まりっぺの母親（渡辺梓）。まりっぺの家はお医者さんであることが途中でわかるが、それも何か象徴的……？ まりっぺの足がなぜ不自由になったのかはわからないが、多分彼女は、村の中に一軒だけある裕福なお医者さんの家の一人娘……？ その母親の2度にわたる次の発言は、抵抗勢力そのものの……？

第1は、はじめてオッチがまりっぺの家を訪ねたとき。小学生の子供の初デート（？）に母親が口出ししなくてもいいのにと思っていると、何とそこで母親の口から飛び出した言葉は……？ 第2は、里子先生に引率されてのクラス全員の無人島への冒険で発生した「ハプニング」が、オッチが空を飛んだことによって解決したにもかかわらず、無事救出された子供たちの親を代表するかのようになり、まりっぺの母親が里子先生に対して言い放った言葉。

この2つの言葉の意味を、あなたはどうか受け止める……？

素朴で美しくいい映画だが……？

この映画は全編を通じて飛騨高山の自然の山々の美しさが大きなポイント。そして、オッチとまりっぺが昆虫採集のために野山を走り回るシーンや小川で泳ぐシーンなどは今や都会はもちろん田舎の小学校でもほとんど忘れられた風景のほず。また1学期最後の日、学校から帰って来たオッチが、ばあちゃんからの「通信簿は？」との問いに「全部2」と答え、ランドセルを放り出すやいなや、「夏休みだ！ 夏休みだ！」と叫びながら網とカゴをもって飛び出していくシーンも今や完全に忘れ去られた昔の風景……。1人パソコンの前でゲームをしたり、小型のテレビゲームを無心に操るのも悪いとは言わないが、今どきの子供たちにもたまにはこういう生活をさせる必要があるのでは……？ ちょうどこの映画は夏休みを狙って劇場公開されるが、例によって（？）その数は少なそう……。素朴で美しくいい映画だが、果たしてこんな地味な映画を夏休み中の子供たちが観るだろうか。そのためには、まずは親が「もしも空が飛べたなら」と夢見た昔を思い出しつつ、こんな映画に興味をもつことが先決なのだが……？

2005(平成17)年6月25日記

道標

「日本のいちばん長い日」と言えば八月十五日。東宝は一九六七年、このタイトルで映画をつくった。三船敏郎が主演し、四五年八月十五日正午の玉音放送までの二十四時間を描いた、故岡本喜八監督の骨太作だ。

今年の8・15は、戦後六十年目の記念すべき節目となった。

同日の新聞各紙は特集のテンコ盛り。小泉純一郎首相は公約として「この日の靖国神社参拝を」

なかったが、首相参拝問題は何ら解決したわけではなく、「先送り」になっただけ。

戦後六十年の総括の必要はドイツも同じ。昨年、前代未聞のドイツ人の監督と俳優によるドイツ語の映画「ヒトラー〜最期の12日間〜」が制作された。日本でも今年七月末、公開され、

8・15と9・11

日本の針路決定の日

坂和 章平



弁護士

大きな話題を呼んだ。

第二次大戦末期の四五年四月、ベルリンのヒトラーはソ連軍の進攻が迫る中、愛人のエヴァ・ブラウンと結婚し翌日自殺した。映画は、ヒトラーが総

アカデミー外国語映画賞にノミネート。パンフレットで映画評論家の北小路隆志氏が指摘しているように、「パンドラの箱がついにこじ開けられた」わけだ。

日本では、七月三十日公開の邦画亡国の「イジス」がパンドラの箱を開けた。平和憲法の下で六十年間平和と安全を享受し、経済繁栄を謳歌してきた日本のタブーを破るものだ。イジス艦が北朝鮮の工作員らに乗っ取られ、艦橋で中井貴一演ずる工作員がつぶやく。「よく見る日本人。これが戦争だ」と。問題の本質をズバリと突いた

統官邸地下要塞で過ごした最期の十二日間を女性秘書ユンゲの証言とその視線から描いている。

ドイツではこれまでナチズムやヒトラーと真正面から向き合い、それを取り上げることはタブーだった。それを破ったこの作品はドイツでアカデミー各賞を受賞し、アメリカでも

このセリフは、今年の流行語大賞に推薦したほどの衝撃があった。

去る8日、参院本会議で郵政民営化法案が可決後、小泉首相は公言どおり衆院解散・総選挙に踏み切った。日本はいま構造改革の行方を決する事実上の選挙戦の真っただ中にある。来るべき「日本のいちばん長い日」は200

ふ る さ と 伝 言

5・9・11。日本の針路を決定づける総選挙の投票日は、くしくも世界秩序を大転換させることになったアメリカの中核同時テロと同じ日だ。

「法案否決」衆院解散の決意を甘くみた自民党の郵政法案反対派の劣勢は目を覆うばかり。郵政民営化をテコとした「自民党ぶっ壊し作業」はいよいよ本格化した。これが「織田信長の変革」であることは誰の目にも明らかだが、さてその行方は……？

他方、民主党は岡田克也代表をはじめ多くの「小さな政府」郵政民営化「構造改革論者」がいるにもかかわらず、タナからボタもち式の政権交代の可能性が目くらんだのは情けない限り。自民党と民主党をガラガラポンし、改革派と守旧派に明確に分離する政界再編の最終章はこれで運れることになる。残念でならない。

来る9・11は「関ヶ原の戦い」以来の天下分け目の大決戦。日本は民主主義国家なのだ。国民は心して投票しなければならぬ。万一、投票率が過半数割れするようなことがあれば、もはやこの国に明日はない。(さかわ・しよつへい、松山市生まれ)